
IS <インフィニット・ストラトス> とある転生者達の物語

アルフレッドサンダース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス> とある転生者達の物語

【Nコード】

N4026BA

【作者名】

アルフレッドサンダース

【あらすじ】

零「なにここ？」大「あらすじだつて」零「作者まかした」大「あとよろ」作「おい！丸投げすな！……えーと作者の処女作ですがどうぞよろしくお願いします。……あ！アドバイスや感想などお待ちしております」

プロローグ（前書き）

作者のアルフレッドサンダースです。
今回私の初作品です
よろしく願います

ブローグ

（零司 side）

い、今起きたことをありのままに話すぜ。
寝る

起きる

目の前真白

「なにこれ!？」

そう叫んだ俺は悪くないはず。

すると後ろから声がしたので振り返ると同じ年くらいの少年がいた。

（大輔 side）

「よう、お前さんも飛ばされたのか」

そう目の前の少年に声をかける。

ちゃんと布団で寝たはずなのに起きたらこの白い空間にいた。

「ここは？」

「さあ？、俺も起きたらこの場所にいたからな」

「そうか」

「あ、俺大輔っていうんだ、よろしく。」

「大輔か、俺は零司。こちらこそよろしく。」

「ああ」

軽く自己紹介をする。

しかしここはほんとにどこなんだ？

そう思ったら、目の前にいきなりじいさんが現れた。

「な!？」

「あんだだれ？」

零司がそう聞く。

するとじいさんはとんでもないことを言ってきた。

「ふむ、わしは君たちの世界で言うところの神様という存在じゃは！？」

（零司 side）

俺と大輔がいきなり現れたじいさんに驚いているといきなりじいさんがまた驚くことを言った。

「実はお主らがここに居るのはわしのせいなんじゃ」

「……………は？」

「間違つて書類汚しちつた」

「はー！？ふざけんなよ！」

「まあまあ大輔。で、俺たちこれからどうすんの？」

「そのことなんじゃが、二人ともISの世界に転生する気はないかの？」

？

「なあ、大輔、ISって？」

「俺も知らん」

お前もかよ

「なんじゃしらんのか？」

ああ

「仕方ないか、まあ簡単に言うとお主らの世界で本だった物で、そのこと似ている平行世界で、内容は学園バトルものだ」
なるほど

「じゃあ、そこで零司お前は？」

「おれもそこで」

「よし、じゃあ学園バトルものに転生するにあたって能力を決めなきゃいかんのだが、お主ら何がいい？」

能力ねえ

「大輔、何にするんだ？」

「ん？俺？ならf a t eに出てくるサーヴァントの能力と宝具っていったら？」

「よかるう」

「なら俺は高度な空間認識能力と現代武器を召喚できる力」

「OKじゃ、じゃあ、その穴に落ちたら転生完了じゃ。」

と言い指さした先にはには二つの穴があった

行くか

「ここで出会ったのも何かの縁じゃからお隣同士にしといたぞ」

「「ありがとな」」

「じゃあな、零司」

「またな、大輔」

そう言い穴に入るがじいさんがまた驚くことを言った。

「あ、転生するから赤ん坊からじゃぞ？」

はいはい

プロローグ（後書き）

感想お待ちしております。

またアドバイスなどもお願いします

第一話（前書き）

今回は白騎士事件です
作者の技量がとても未熟なため半端な物になってしまいました
そこはご愛嬌で
それではどうぞ

第一話

（side 遠坂大輔）

俺とお隣に住んでいる布仏零司がこの世界に転生して10年、俺達二人の5歳の誕生日にまたじいさんの所へ行つてこの世界の事情を説明された。

IS正式名称インフィニット・ストラトス、もとは宇宙活動用のパワードスーツとして篠ノ之束博士が開発したもので、しかし白騎士事件を期に兵器への転用が懸念されアラスカ条約締結によりスポーツとして使われることになった。このISには欠陥があり女性にしか反応しないが、唯一ISを動かせる男【織斑一夏】を中心に巻き起こるドタバタ学園バトルラブコメディと。

このこの説明を聞いた時俺と零司わ揃つて落ち込んだ。特に零司は現代兵器がISには全く効かないと知りすぐ落ち込んでいた。

俺達の家は日本の対暗部用暗部「更識家」に代々仕えている一族で布仏家は情報収集等主に後衛を主として活動していて遠坂家は実行部隊・対魔術部隊を中心に活躍している。ちなみに魔術とは・・・

「オイ、大輔。いい加減戻ってこーい。」

「すまない。なんか変な電波が来てしまつてな。」

「そうか、現実逃避もほどにしておけよ。」

いや、仕方ないだろ。日本しかも家のある関東地方に向けて大量のミサイルが飛来してきているんだから。

そう今はこの世界が大きく変わるきっかけとなった白騎士事件の最中だった。篠ノ之束博士によるISの発表の後、突然各国の弾道ミサイルが制御不能の事態に陥り一斉発射された。自衛隊が全力を尽くしてはいるが未だ2341発ものミサイルが日本に向けて接近している。

この時、俺は部屋で零司とその姉である虚さん、妹の本音ちゃん。

更識家の美咲と簪ちゃん姉妹と居た。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん。」

「お姉ちゃん」

本音と簪は泣きそうになっていて、三人が慰めていた。

「大丈夫、お兄ちゃんがちゃんと付いているから」

「ほんと？」

「ほんとだよ、お姉ちゃんも付いてるから」

「大丈夫よ簪ちゃん、大丈夫」

その時ミサイルが突然爆発した。

（side 零司）

ミサイルが爆発した後一体の白い機械を纏っている女性が立っていた。あれが白騎士だろう。その後白騎士は日本刀らしきものを使いばったばったとミサイルを両断していく。白騎士を抜けたミサイルも奴が召喚したであろう大きなビーム砲によってどんどん落とされていく。最後の爆発が終わったあとには居たのは白騎士だけとなった。その後各国の首脳陣は白騎士捕獲のため大量の戦闘機、巡洋艦や駆逐艦、潜水艦果てには空母艦隊等明らかに過剰戦力だろ！と叫びたくなるような大部隊を送り込んだがその部隊さえも奴の力の足元にも及ばなかった。

白騎士は日没と同時に全リーダーから完全に消失、^{ロス}世界は新たな兵器に恐怖することになった。

ニュースが終わったとき仕事が終わったであろう親達が帰ってきた。本音と簪はそれぞれの親に泣きついてしまった。その時大輔が話しかけてきた。

「零司。」

「ん？何だ？大輔」

「これから、世界のパワーバランスが変わっちまうな。」
「ああ」

ほんとに、パワーバランスどころか何もかもが変わっちまうな。

第一話（後書き）

誤字・訂正報告、アドバイス、感想お待ちしております

第2話（前書き）

今回は大輔と零司の修行風景です
どうぞ

第2話

（side 遠坂大輔）

白騎士事件から数日、世界はISを求めて争いが起き戦争になりかけた時に篠ノ之博士の声明、アラスカ条約締結により、一端事態は鎮静した。

またISが女性にしか反応しないことが各国でわかり女性優遇制度が整えられ、急速に女尊男卑の社会へと移行していく。

しかし遠坂家と布仏家で行われている俺と零司の修行はいつも通りの風景だ。

ちなみに俺が魔術の修行を始めたのは小学校3年からで、零司も銃の才能があつたらしく小学校3年から訓練している。

現在俺は遠坂家の地下で宝石魔術を父さんから教わっている。

「ではやってみよう」

「はい」

今は初歩であるガラスの再生を行っている。

二つに分かれたガラスの石に魔力を込めて再生する修行で、このことにより魔力をコントロールする力をつけるのが目的だ。

今まで座学だったため今回が初めての実践だ。

洋紙に書いた魔法陣の中にガラスを入れ両手をかざす。

両手から魔力を注入する。

たちまちガラスの石は元の丸い石になった。

父さんの話によると俺には魔術師としての力がとても大きく、普通の魔術師より2倍も3倍も大きいらしい、まあじいさんからもらった能力の影響だろう。

話を戻すがおれの修行はここで終わりではなくここから木の造形を作るのが目的だ。

これは魔力コントロールの応用でまっすぐ上へ伸ばすのと葉をつけるように魔力を霧状に放出しすぐさまに結晶化させる。

これが難しく結晶化は気を抜くとすぐ霧散してしまう。

集中

集中

集中

しゅう……………

「あつ」

気を抜いてしまい霧にしていた魔力はすぐに霧散してしまった。

「そう落ち込むな、まだ修行初日だ」

父さんが落ち込む俺を慰める。

「もともと石にするのは私の見立てでも一週間はかかると予想していたのだ。

それを一日で出来たのだ。この調子で毎日欠かさず修行すれば一か月で出来るかもしれんな。」

そのことを聞いて無性に嬉しくなった。

「それじゃあ毎日欠かさず修行するんだぞ」

「はい！」

（side 布仏零司）

今俺は布仏家特製練習場に来ている。

今ここでは俺が射撃訓練をしている。

4年生になって初めてハンドガンからサブマシンガンへと銃の種類

を変えることができた。

パン！

パン！

パン！

パン！

パン！

的に向けて五発9mm弾を撃つ。

MP5から放たれた弾丸は的に向かうが慣れていないおかげで的のギリギリに散らばった

「3点」

まあ、仕方ないだろう。

「しかしこの年でSMGか」

「？父さん？」

なにを悩んでいるのだろう？

「いやな、成長が早いなと思ってな」

その事ですか。じいさん（神）からの贈り物のおかげですから。

「だけど覚えておけ、せの力は過ぎた力だ。いつ使うか、何の為に使うか考えて使わなければ」

それはただの暴力になる事を」

「はい！」

俺はその日射撃訓練にいそしんだ。

第2話（後書き）

次回から更新速度が落ちますが一週間に一話は掲載する予定です。
まあ、出来上がり次第掲載しますが。
アドバイスなど随時受付中です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4026ba/>

IS<インフィニット・ストラトス> とある転生者達の物語

2012年1月12日21時51分発行